

## FIDバスケットボール選手のプレーの様相 ー オフェンスにおけるエリア利用とボール移動の頻度に着目してー

佐藤 実祐\* 佐々木 全\*\*

(令和3年2月1日受理)

SATOU Miyu, SASAKI Zen

Use of Space on Offense and Frequency of Ball Movement of FID Basketball Players

### I. 問題と目的

近年, 障害者スポーツは益々盛んになり, スポーツ人口が増えている。障害者スポーツは, 「リハビリテーションの延長」という狭義のものから, ノーマライゼーション社会の構築に向けた役割や, 障害者の自立や社会参加を支援する役割を果たすようになった(厚生労働省, 2011)。

障害者スポーツの競技種目には, 視覚障害者を対象としたゴールボール, 身体障害者を対象とした車椅子バスケットボールのように障害種に特化した内容や方法で実施される競技がある一方で, 一般の内容や方法を用いる競技もある。その一つが, 知的障害者を対象としたFIDバスケットボールである。FIDとは, For players with an Intellectual Disability の略称であり, 単にIDと表記されることもある。これに関する競技団体として, 1999年に一般社団法人日本FIDバスケットボール連盟が設立され, 都道府県連盟が北海道, 岩手県, 秋田県, 福島県, 東京都, 神奈川県, 長野県, 愛知県, 山口県, 長崎県, 鳥取県, 宮崎県に設立された。その上で, 全国を6ブロック(北海道・東北, 関東, 東海・北信越, 近畿, 中国・四国, 九州)に分け, 各エリアでの強化育成並びに競技普及が進められている(日本FIDバスケットボール連盟, 2020)。

都道府県連盟の一例として, 岩手県においては,

2000年に公立の特別支援学校高等部におけるバスケットボール部設立に端を発し, その後, 2016年の第71回国民体育大会並びに第16回全国障害者スポーツ大会開催を機運とし, 2015年に岩手県IDバスケットボール連盟が設立された。現在までに部活動の発展として, 高校部生徒や卒業生などからなる男女各1チームが活動をしている。指導者は, 特別支援学校に勤務する教職員有志数名であり, 競技指導から組織運営, 選手個々が必要とする生活支援の一部までを担っている(岩手県IDバスケットボール連盟副理事長からの聴取, 2020.1.10.)。

このような経緯や現状を踏まえつつ, FIDバスケットボールにおける課題を挙げるならば, やはり競技力の向上であろう。このことは, FID選手自身にとっての願望であり, 指導者に対して指導方法の探究を要請するものである。一般的に, バスケットボールの指導方法は数多く開発されているが, FID選手に特化した指導方法があるのか, あるいは必要なのかは, 現在のところ不明である。そもそも, 現在にあってはFID選手を対象とした研究は少なく, その運動面の特性を明らかにしようとするもの(例えば, 形本・竹内・山下・小川, 2001; 形本・小倉・竹内・山下・小川, 2002)や, 実践報告(例えば, 齋藤, 2009)などに留まっております。FID選手に対する有効な指導方法を具体的

\*岩手県立盛岡ひがし支援学校, \*\*岩手大学大学院教育学研究科

に検討した研究や、それを開発するための布石としてのプレーの様相を描き出した研究はない。

そこで、本研究では、FID選手のプレーの様相を明らかにし、指導方法を開発する上での着想を得ることを目的とする。

## II. 方法

FID選手に対する指導の目標は、当然ながら、ゲームにおけるプレーの向上である。そのためFID選手のプレー様相を明らかにするには、ゲームにおけるそれを明らかにすることが必要であろう。このために、本研究では「ゲーム分析」(内山・武井他, 2001)を用いる。ゲーム分析の目的は、スポーツの中で起きる様々な現象を数値化することにより、技術練習やトレーニング、チームの作戦に役立てることである(大橋, 1999)。バスケットボールのゲーム分析では、例えば、ルール改正後の試合内容と戦術の変化(中井, 2012)や、シュート位置とリバウンドボール獲得位置の関係(小谷・清水他, 2011)を明らかにすべく実施されていた。

本研究では、ゲームの様相として、ゲーム中に起こっている現象を描き出し、その背景要因として反映されるFID選手のプレー様相を把握する。この際、動画から得られた観察情報を加えて解釈する。その上で、有効な指導方法についての展望を得る。

### 1. 調査対象

A県のFIDバスケットボール女子チームを対象とした。本チームは、18歳から25歳までの女子選手計8名が所属しており、3名のコーチが指導していた。コーチはいずれも特別支援学校教員であった。また、練習は月2～4回、1回2時間程度であった。選手は、特別支援学校高等部生徒から20代の社会人であり、社会人は勤務状況から参加の頻度にはばらつきがあった。また、競技歴も様々であり、技術面では、ボール操作の基礎的な技能は不安定で、身体能力についても個人差も大きかった。

また、ゲーム分析の対象として、練習時のミニ

ゲームにおけるオフェンス場面を対象とした。具体的には、20XX年の3回の練習会における10試合であった。これらは、指導者を選手として交えて、5対5の形式で5分間実施された。動画は、オフェンスの全容が収まるような位置から1台のビデオカメラで撮影した。得られた動画データのうち、対戦中の2チームのうち一方のみを選定し、そのチームがボールを保持し、かつフロントコートにボールが入った瞬間から、得点やターンオーバーによってボールの保持が終了するまでの間を分析対象とした。

### 2. 調査及び分析方法

オフェンスで使用するフロントコートを縦横5等分し設定した25エリアにおいて、以下の3つの内容の生起回数を目視にて記録した。フロントコートのエリア分割のイメージをFig.1に示した。記録作業は、第一筆者が実施したが、第二筆者ならびにバスケットボールに精通する研究協力者1名によって記録方法及び内容について確認し判断基準を定めた上で実施した。

第一の内容は、「選手が利用した回数」である。これは各選手がプレー上の意図をもってエリアを

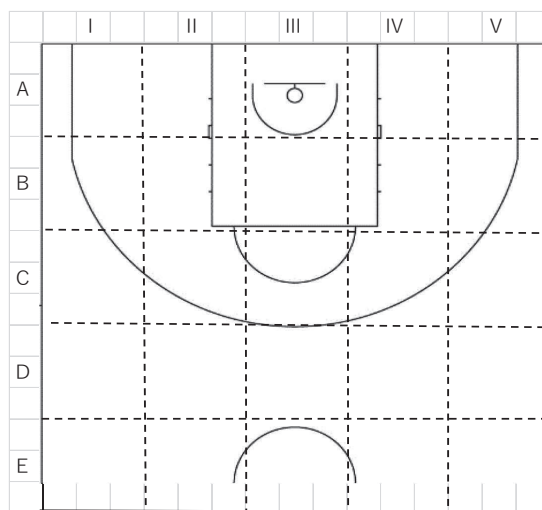


Fig.1 フロントコートのエリア分割

意味し、ボールを受け取ったエリア、ボールを受け取るべく位置をとったエリア、パスやシュートを実施したエリアなどである。ただし、ドリブルやボールを持たないオフボールの状態で通過した

だけのエリアは含めない。

第二の内容は、「ボールが移動したエリア回数」である。これは、パスやドリブルにおける始点と終点の位置、シュートした位置、リバンドを獲得した位置などである。ただし、パスやドリブルなどによって通過しただけのエリアは含めない。

第三の内容は「シュートの回数」である。併せてシュートの成否、成功率、ワイドオープンシュートか否かを判断しその本数について記録した。ワイドオープンシュートとは、ディフェンスによるチェックを逃れて、完全にフリーの状態を実施するシュートである。

### 3. 倫理的配慮

本研究ならびに動画撮影については、チームの

関係者ならびに選手に対して事前及び練習会当日に書面ならびに口頭にて、趣旨ならびに、個人のプライバシーは保護されること、協力についての判断は任意であることなどを説明し同意を得た。

### Ⅲ. 結果

「選手が利用した回数」「ボールが移動した回数」「シュートの回数」について、エリアごとの回数と、各合計数に対する割合を算出しTable1に示した。また、これに基づき、「選手が利用したエリア」「ボールが移動したエリア」「シュートの回数」をFIG.2に示した。これによると、三者の傾向は概ね一致していた。以下、順を追って記す。

第一に、「選手が利用したエリア」における全エ

Table 1 エリアごとの「選手が利用した回数と割合」「ボールが移動した回数と割合」「シュートの回数と割合」

エリア	選手が利用した回数と割合		ボールが移動した回数と割合		シュートの回数と割合	
A-I	12	1.8%	0	0.0%	0	0.0%
A-II	33	5.0%	18	5.2%	14	7.0%
A-III	43	6.5%	31	9.0%	63	31.5%
A-IV	49	7.4%	44	12.8%	32	16.0%
A-V	6	0.9%	1	0.3%	0	0.0%
B-I	10	1.5%	2	0.6%	0	0.0%
B-II	24	3.6%	19	5.5%	16	8.0%
B-III	75	11.3%	57	16.5%	48	24.0%
B-IV	43	6.5%	22	6.4%	10	5.0%
B-V	2	0.3%	4	1.2%	0	0.0%
C-I	36	5.4%	8	2.3%	0	0.0%
C-II	17	2.6%	7	2.0%	2	1.0%
C-III	62	9.4%	37	10.7%	11	5.5%
C-IV	24	3.6%	7	2.0%	2	1.0%
C-V	16	2.4%	3	0.9%	0	0.0%
D-I	9	1.4%	2	0.6%	0	0.0%
D-II	45	6.8%	15	4.3%	0	0.0%
D-III	59	8.9%	36	10.4%	2	1.0%
D-IV	35	5.3%	25	7.2%	0	0.0%
D-V	8	1.2%	1	0.3%	0	0.0%
E-I	5	0.8%	0	0.0%	0	0.0%
E-II	9	1.4%	2	0.6%	0	0.0%
E-III	21	3.2%	3	0.9%	0	0.0%
E-IV	14	2.1%	1	0.3%	0	0.0%
E-V	4	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
合計	661		345		200	

リアの合計は661回であった。このうちB-Ⅲのエリア利用が最多で75回（11.3%）であった。これは、リングに最近接のペイントエリア中央部分であった。これに次いで多かったのは、C-Ⅲのエリア利用で62回（9.4%）であった。これは、ハイポストであった。

また、総じてⅢのエリア群、いわゆるミドルレーンでは割合が高く、A-Ⅲ～E-Ⅲの合計は260回（39.3%）であった。これに比してIとVのエリア群、いわゆるサイドレーンでは割合が低く、それぞれ28回（10.8%）と14回（5.4%）であった。

なお、B-Ⅲと、C-Ⅲのエリア利用は、特定の選手2名によって占められていることが目視にて確認された。

第二に、「ボールが移動したエリア」における全エリアの合計は345回であった。このうちB-Ⅲのエリア利用が最多で57回（16.5%）であった。これは、リングに最近接のペイントエリア中央部分であった。これに次いで多かったのは、A-Ⅳの44回（12.8%）、C-Ⅲの37回（10.7%）、A-Ⅲの31回（9.0%）であった。これらは、ペイントエリア内及びその近接エリアであった。ハイポストであった。

また、総じてⅢのエリア群、いわゆるミドルレーンでは割合が高く、A-Ⅲ～E-Ⅲの合計は164回（47.5%）であった。これに比してIとVのエリア群、いわゆるサイドレーンは割合が低く、それぞ

れ12回（3.5%）と9（2.6%）であった。

第三に、「シュートの回数」における全エリアの合計は200回であった。このうちA-Ⅲのエリア利用が最多で63本（31.5%）であった。これは、リング直下の、いわゆるゴール下であった。これに次いで多かったのは、B-Ⅲの48本（24.0%）、A-Ⅳの32回（16.0%）、あった。これらは、ペイントエリア内及びその近接エリアであった。

また、総じてAとBかつⅡ、Ⅲ、Ⅳの6つのエリア、いわゆるローポストでの割合が高く、その合計は183回（91.5%）であった。これに比してIとVのエリア群では0本であり、D-Ⅲでのシュート2本（1.0%）のみであった。

なお、シュートの成功は30本で、成功率は15.0%であった。また、30本のうち、ワイドオープンシュートとして判断された本数は、96本（全体の48.0%）であった。

#### IV. 考察

本研究では、ゲームの様相として、ゲーム中に起こっている現象を描き出し、その背景要因として反映されるFID選手のプレー様相を把握する。この際、動画から得られた観察情報を加えて解釈する。その上で、有効な指導方法についての展望を得る。

##### 1. ゲームの様相

ゲームの様相として、「選手が利用した回数」

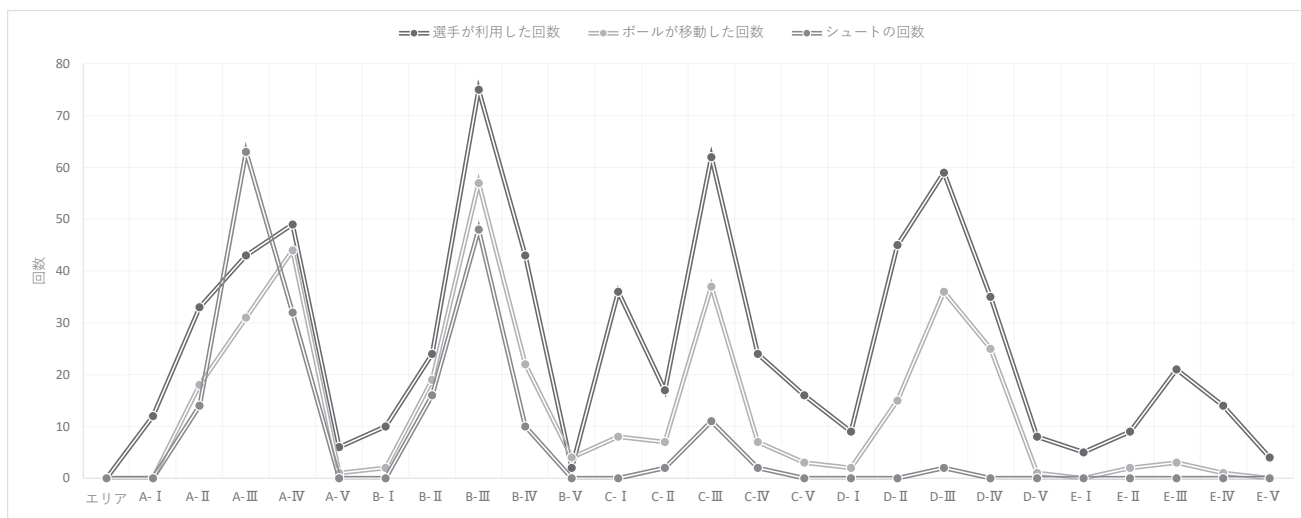


Fig.2 エリアごとの「選手が利用した回数」「ボールが移動した回数」「シュートの回数」の比較

「ボールが移動した回数」「シュートの回数」は、いずれもインサイドに偏在しており、三者の関係として、選手がインサイドに位置取り、そこにボールが供給され、シュートに至ることが明らかであった。

このようなオフェンスの戦術に関する評価は、その成否に依るところだが、シュートの成功率は15%という低値に留まっていた。すなわち、オフェンスの戦術は十分機能を発揮していないと考えられた。

ワイドオープンのシュートが48%であることは、シュート成功率の低値の要因でもあり、インサイドのディフェンスが密集する状況下でのシュートが多かったことをも意味する。そもそも、インサイドは、「選手が利用した回数」が多く、しかも特定の選手のみが相応の時間をもって利用する傾向にあった。また、インサイドでは「ボールが移動した回数」が多く、アウトサイドでは少ないことから、ボールはアウトサイドを回らず、インサイドに一方的に供給されていた。すなわち、コート上での人とボールの動きは、ともに固定的で少なかった。

## 2. プレーの様相

ゲーム様相の背景要因としてのFID選手のプレー様相は、以下に示す運動面、認知面における要因が反映されていると考えられた。

まず、運動面について、選手の基礎的な技術及びそれに関わる運動面の要因があると察せられた。走力や跳躍力の不足もあるが、投球の技術及び体力における課題が大きな要因であった。すなわち、パスやシュートの距離が短いため、コート縦断するようなパスはしにくく、シュートレンジも狭くなり、結果としてインサイドへの依存が生じたと考えられた。

次に、認知面について、選手の戦術の理解や状況判断などの認知面の要因があると察せられた。ここでは、そもそもチーム及び個人において戦術のレパトリリーが少なく、個別具体の局面における状況判断が難しいことが要因となる。すなわち、状況判断を回避した結果として、インサイドに依

存しながらも修正が効かない、画一的なプレーが繰り返されることになったものと考えられた。

## 3. 指導方法の検討

以上で指摘した運動面と認知面の要因に基づくプレーの制限は、知的障害ならずとも、年少者や初心者のように未熟な競技者であれば起こりうることであろう。指導者は、その状況をできるだけ早く、できるだけ確実に解消し、プレーを発展することをめざす。FIDバスケットボールにおいてもそれは同様である。指導者として考えるべきは、どの要因に着手するかということであろう。

ゲーム様相とプレー様相の改善を考えたとき、どのようになればよいかという「結果の理想型」を語ることは容易である。コート縦横無尽に選手が動き、ボールを動かし、優位空間を創出し、ワイドオープンの状態でシュート確実に得点すればよいのである。しかし、知的障害者の運動面と認知面を想定し、また、FIDバスケットボールのチーム経営や練習環境などの条件を想定した、どのようになればよいのかという「過程の理想型」を見出す必要がある。これこそが指導方法を開発する上での着想となるものだろう。

その手掛かりとなる指導理論に「戦術アプローチ」がある。これは、「ゲームでのプレイを強調し、ゲームとの関連で技術学習を位置づけようとするもの」(リンダ・L・グリフィン他, 1999)である。本研究で対象としたゲームにおいては、個人の技能に規定された戦術が限定的に用いられることになったが、戦術アプローチの発想では、ゲームで発揮すべき戦術を予め構成する。ここでは各選手が明確な役割を持つ技能でこなすことでオフェンスの成功を得ようとする。戦術アプローチを踏まえた実践研究では、中学校体育の授業実践で、役割を明確にしながらゲームに参加し、ゲーム傾向を把握して対策を立案する学習方法が、生徒たちの運動有能感やゲーム内の対決状況の把握に必要な認識範囲の拡大につながった(土田・與那嶺・伊藤・阿部・北澤, 2011)としたものがある。また、発達障害者を対象としたタグラグビーの実践においては、戦術アプローチと同様に各選手の

特性や志向に応じた役割分担とチーム戦術を構成することによって、一つ一つのプレーが成立しやすくなり、個人の技術の習熟が得られやすくなったというエピソードが集積されている（佐々木・伊藤・名古屋，2012；佐々木・今野・名古屋，2013；佐々木・名古屋，2015）。また，知的障害者である選手は，動きがパターン化してしまいがちとの指摘（奥田・樋口・藤本他，2011）もあるが，適切かつ有効なチーム戦術の中で確かな動きとして実施できるとすれば，それは強みになる。また，複雑なゲーム展開の中で，選手が自らの動きを役割として理解するならば，状況判断がしやすくなるだろう。このことについて，未熟な競技者にはクローズドスキルの発揮から着手することで，徐々に必然的にオープンスキルに発展しやすくなるとの指摘もある（佐々木，2018）。

このような戦術アプローチに立脚した指導を実施する上では，現有戦力を駆使した戦術の構想があり，その実現に即するような練習メニューの開発が必要であるだろう。基礎練習をゲームで活かすという発想ではなく，ゲームにおける戦術を実施するための練習メニューとする必要がある。例えば，ローポストからのシュート練習をして，ゲームで用いるということではなく，スクリーンを使ってペイントエリアに飛び込み，パスを受けてシュートするというような戦術について，その流れを練習する必要がある。ここでは，ボールを持たないオフボールの動きも構想される必要がある。今後，実践としての指導方法の開発ならびにその効果の検証が待たれる。

## 謝 辞

本研究にあたり，X県バスケットボールチームの選手及びスタッフに多大なるご協力をいただきました。ここに記し，感謝申し上げます。

## 文 献

一般社団法人日本FIDバスケットボール連盟(2020) 連盟概要. <http://www.jbf-fid.jp/>(2020.4.16. 閲覧)

- 形本静夫・竹内敏康・山下輝明・小川直樹（2001） I Dバスケットボール選手の体力体力科学, 50 (6), 988.
- 形本静夫・小倉裕司・竹内敏康・山下輝明・小川直樹(2002)男子および女子 I Dクラスバスケットボール選手の体力, 体力科学, 51 (6), 767.
- 厚生労働省 (2011) 政策レポート 障害者スポーツ.<https://www.mhlw.go.jp/seisaku/2011/01/01.html>(2020.4.16. 閲覧)
- 小谷究・清水貴司・松尾晋典 (2011) バスケットボールにおけるリバウンドについての研究—シュート位置とリバウンドボール獲得位置の関係について—社会情報学研究,17,63-75.
- リンダ・L・グリフィン他(著)・高橋健夫・岡出美則(監訳) (1999) ボール運動の指導プログラム—楽しい戦術学習の進め方—大修館書店.
- 中井聖 (2012) バスケットボールにおけるルール改正後の試合内容と戦術の変化.近畿医療福祉大学紀要,13(2),39-47.
- 奥田邦晴・樋口由美・藤本愛美・片岡正教・川崎純・南野博紀・安田孝志・増田基嘉・赤井友美・松田佳憲・上田絵美・奥平由香・久岡隆昭・日下由紀夫・林義孝 (2011) 障害者競技スポーツ科学支援事業“動作解析”に関する研究・報告.生活環境支援系理学療法.9.2-188.
- 齋藤利之(2009)日本における知的障害者バスケットボールの支援体制, 浜松大学研究論集, 22 (2) 271-275.
- 佐々木全(2018)発達障害のある児者を対象とした「タグラグビー」における支援方法に関する事例的検討—ゲームプランと局面的戦術の統合的観点から—,岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要,17,1-10.
- 佐々木全・伊藤篤司・名古屋恒彦(2012)高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告（第15報）—参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(1)—,岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 11, 233-242.

- 佐々木全・今野文龍・名古屋恒彦(2013)高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第17報)―参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(2)―.岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 12, 243-255.
- 佐々木全・名古屋恒彦(2015)高機能広汎性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第19報)―参加児の活動経過及び心的過程の変遷に着目したタグラグビーにおける支援内容と方法の検討(3)―.岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要,14,409-421.
- 土田了輔・與那嶺響・伊藤雅則・阿部敏也・北澤太野(2011)バスケットボールにおける役割付与がプレーヤーのボールを持たないときの動きに及ぼす影響.上越教育大学研究紀要,30,245-252.